

KATHLEEN TURNER

SERIAL MOM

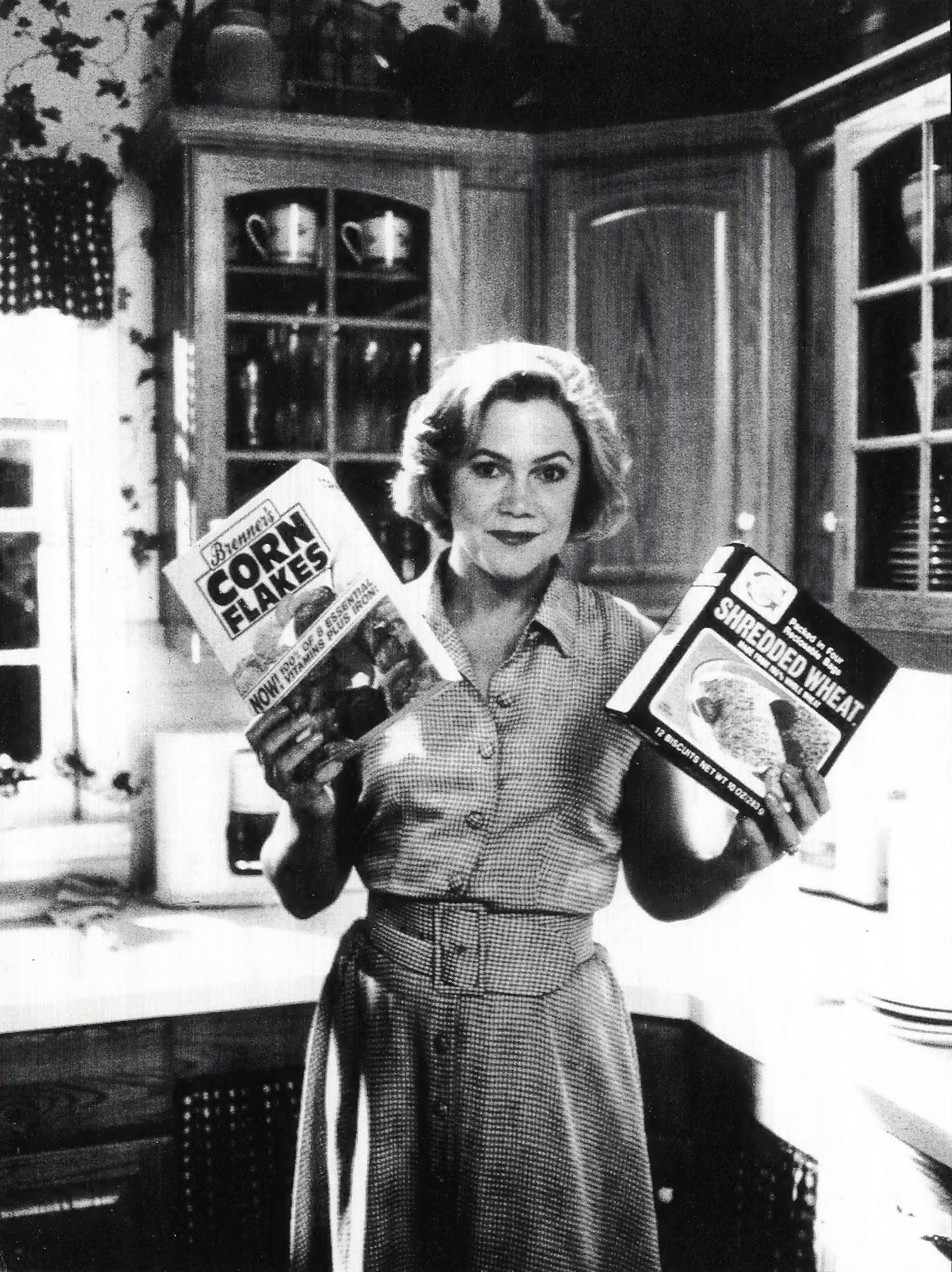
SAM WATERSTON







RICKI LAKE



"... at least she meant well."

John Waters

シリアル・ママ

CONTENTS

1994年　アメリカ映画／1時間34分／カラー／5巻2556m／ドルビー・ステレオ／1.85フレーム／翻訳：古田由紀子／共同提供：松竹・三井物産・アミューズ／配給：松竹富士　サントラ盤：MCAビクター

INTRODUCTION

ゴミを分別しない奴、駐車場で横入りする奴、レンタルビデオの返却時に巻き戻さない奴…、そんな現代社会にあふれる理不尽な輩（やから）に怒りのお仕置をくらわす必殺ママ。郊外の閑静な住宅街、肉切り包丁片手に怒濤の殴り込みをかけた彼女がいつしかマスコミの人気者と化していく——。

気をつけろ！ママを怒らせると血の雨が降る。『フォーリング・ダウン』のマイケル・ダグラスもブッ飛ぶ狂気のヒロイン、人は彼女を“シリアル（連続殺人）ママ”と呼ぶ。

映画は猟奇連続殺人の犯行から裁判までの実録スタイルで展開する。一見平和な郊外住宅に住むごく平凡な住民たちの奥底に潜む醜い秘密。そんな人間の生の姿を描き、誰の心にも破裂しそうに溜まっているフラストレーションと怒りと殺人衝動を一気に発散させてくれる凄い映画がやってきた。

『ピンク・フラミンゴ』（72）から『クライ・ベイビー』（90）へ、伝説的カルトムービーのカリスマからメジャーゾーンへと成長を遂げたボルチモアの鬼才ジョン・ウォーターズが、主演に『ロマンシング・ストーン／秘宝の谷』『ローズ家の戦争』のキャスリーン・ターナーという大女優を迎えて贈る待望の最新作『シリアル・ママ』。これは、強烈なブラック・ユーモアと明るいバイオレンスに満ちた世紀末のソープオペラ。そして、本年度カンヌ国際映画祭のクロージング作品に選ばれて世界中の映画人のド肝を抜き、批評家から大絶賛された過激なストレス解消ムービーだ！

出演はママを演じるターナーをはじめサトフィン家のパパには『華麗なるギャツビー』『キリング・フィールド』の名優サム・ウォーターストーン。長女ミスティには『ヘアスプレー』『クライ・ベイビー』とウォーターズ映画の新しい顔となりつつあるリッキー・レイク。長男チップには『グーリーズII』等を経てこれが初の大役となる若手マシュー・リラードが各々扮する他、迷惑な隣人ヒンクル夫人役で8ミリ『ROMAN CANDLES』以来のウォーターズ作品の常連ミンク・ストール、同じくアッカーマン夫人役で『チャンプ』や数々のTV出演で知られるベテラン、マリー・ジョー・キャトレットが出演。また『クライ・ベイビー』にも出演していた元ポルノの女王トレイシー・ローズがミスティのボーイフレンドの浮気相手に、テロリストに誘拐されその仲間となって銀行強盗までやらかして話題となった新聞王の孫娘パトリシア・ハースト（彼女も『クライ・ベイビー』に出演）が陪審員の一人として、全米TV界の人気女優スザンヌ・サマーズが劇中、TVムービー化される“シリアル・ママ事件”でママ役を演じることになる本人の役で顔を見せるなど、随所に飛び出す技ありのキャスティングも見逃せない。

製作は『愛を殺さないで』やショーン・コネリー主演の近作『グッドマン・イン・アフリカ』のジョン・フィドラーとマーク・ターロフのコンビ。撮影監督は『裸の銃をもつ男』の3部作や『キング・オブ・ハーレー』のロバート・スティーブンス。音楽は『ロボコップ』『レッド・オクトーバーを追え！』のベイジル・ポールドゥリス。プロダクション・デザインのヴィンセント・ペラーニオと衣裳のヴァン・スミスは多くのウォーターズ作品を手掛けたウォーターズ組のスタッフ。また、編集のジャニス・ハンプトンとエリカ・ハギンズは『ヘアスプレー』『クライ・ベイビー』に続いてのウォーターズとの仕事となった。

なお、この作品は他のウォーターズ作品と同じく彼の故郷ボルチモアで撮影された。



まず最初にジョン・ウォーターズのことを復習しよう。

三留まゆみ

1946年メリーランド州ボルチモア生まれ（同郷の有名人にはフランク・ザッパ、バリー・レビンソン監督などがいる）。10代の頃に当代随一のギミック（仕掛け）の王さまウィリアム・キャッスルの映画に魅せられ、映画は芸術ではなく見せ物であることを知る。キャッスルはジョー・ダンテの「マチネー」のモデルになった伝説の監督兼製作者。あの映画にもあったけど、観客にはったりをかましたりすることに命を賭けた人だった。

64年、18歳のときに祖母からもらった8ミリカメラではじめて映画をつくる。「黒の皮ジャケットの女」というモノクロ、17分の短篇。お話は黒人男性と白人女性がＫＫＫ団員を介添えに屋根の上で結婚式を挙げるというぶっとんだものだった。続く「ローマン・キャンドルズ」には、後に彼の作品の常連となる女装の怪優ディヴァインやミンク・ストールが出演。その後も彼は次々とバッドテイストな作品を発表していく。

68年、「お前のメーキャップを食え」（16ミリ）。69年「モンド・トラッショ」（ディヴァイン扮するデブ女が轢き殺した女の死体と共にボルチモアをさまよう）。ディヴァインが全長15フィートのザリガニにレイプされる「マルチプル・マニアックス」（70）、そして変態一家大バトルの問題作「ピンク・フラミンゴ」（72・ディヴァインの犬のウンコ一気食い！）。ディヴァイン扮するひたむきな少女（？）が転落の一途をたどり最後は電気椅子に消える「フィメール・トラブル」（74）、ウォーターズ版不思議の国のアリス「デスパレート・リビング」（77）、いやーな臭いの出る映画「ポリエステル」（81）。

けれどもウォーターズの怪進撃はこのあたりでいったん休止する。なぜなら彼の映画の常連だったイディス・マッセイ（「ピンク・フラミンゴ」の卵おばさん）やディビッド・ロカリーといった俳優たちが次々とドラッグであの世へ行ってしまったから。

それから数年後の87年、ウォーターズは60年代ボルチモアン・グラフィティ「ヘアスプレー」でメジャーに進出する。映画は当たったが、公開の2週間後、ディヴァインが死亡。42歳だった。この映画にはディヴァインの娘役でリッキー・レイクという太っちょの女の子が出演してる。彼女はこのあとの50年代非行少年ミュージカル「クライ・ベイビー」（90）にも臨月の高校生役で出演（この作品にはイギー・ポップとかトレイシー・ローズとかウォーターズっぽい人たちが出てたっけね）、そのままウォーターズ組の一員となり、今回のシリアル・ママでも長女ミスティ役で顔を出している。

そう、そして「シリアル・ママ」だ。ごくごく平凡な、アメリカの中流を絵に書いたような家庭の主婦が連続殺人を繰り返す。なに食わぬ顔で、次々と、残酷に隣人知人をぶっ殺していく。動機は単純明快、『超ムカつくー』。ゴミの分別をしないやつ、レンタルビデオを巻き取って返さないやつ、駐車場で割り込みするやつ…………に、必殺ママはおばさんの論理で正義の鉄槌を下す（考えてみればディヴァインの〈おばさんもの〉もこのスタイルだった）。

これを演じるのがキャスリーン・ターナーだ。ウォーターズ自身、『彼女が包丁を持って走るのを見たときは天にも昇る気持ちだった』といっているように、これ以上の適役はいない。あのたぷんとした二の腕、どっしり太い腰回りに素敵な二重アゴ、ディヴァインの在りし日を思い出す。さあ、キャスリーン、もっと体重を増やそう。もっとあつかましく大胆になろう。ウォーターズ・ファンはあなたを待っている。ウォーターズはついに新しい理想のヒロインを獲得した。あとは過激な前進あるのみだ。

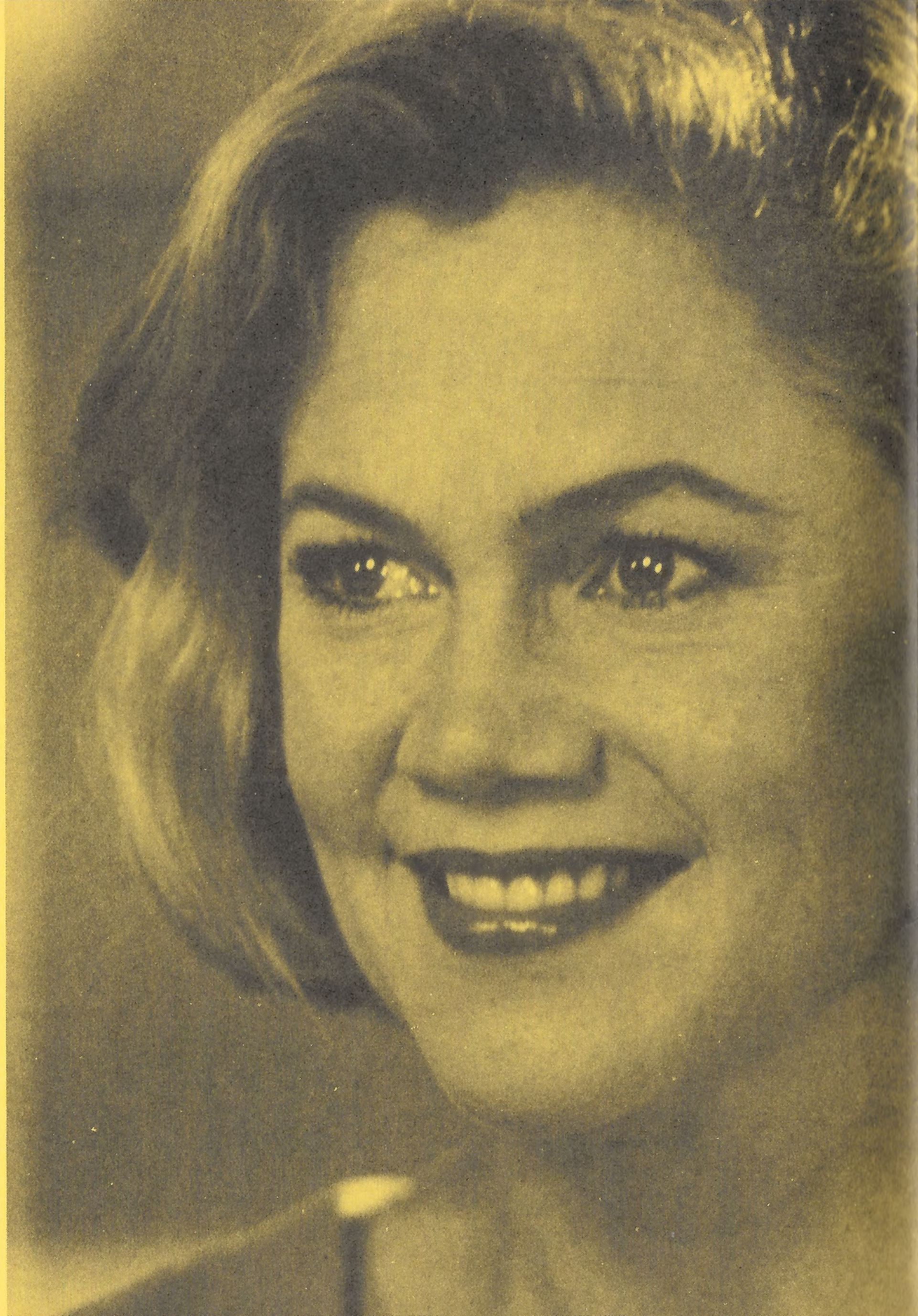


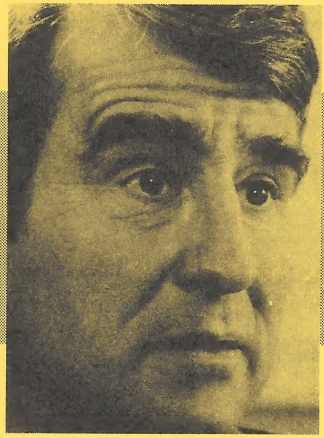
キャスリーン・ターナー
（ビバリー・サトフィン）

1954年6月19日、アメリカのミズーリ州スプリングフィールド生まれ。サウスイースト・ミズーリ州立大学で演劇を学んだ後、メリーランド大学で美術の学位を取得。ニューヨークへ出てオフ・ブロードウェイの舞台に立って女優の道をスタートさせた彼女はその直後にＴＶシリーズ『THE DOCTORS』のレギュラー役を獲得、ブロードウェイの『GEMINI』に出演するなど一気に頭角を現し、81年、ローレンス・カスダン監督の『白いドレスの女』で映画デビュー。そのセクシーな悪女ぶりで世界中にセンセーショナルを巻き起こし、ゴールデン・グローブ賞の"ニュースター・オブ・ジ・イヤー"、英国アカデミー賞の主演女優賞にノミネートされた。続く『2つの頭脳を持つ男』（83・V）では見事なコメディエンヌぶりも発揮、やがてその才能はマイケル・ダグラスと共演した大ヒット作『ロマンシング・ストーン／秘宝の谷』（84）で完全に開花し、トップ・スターの座を確実なものにした。85年には『女と男の名誉』でゴールデン・グローブ賞最優秀主演女優賞を受賞、実写とアニメの合成で話題を呼んだ『ロジャー・ラビット』（88）での声だけの出演も話題を呼んだ。その後もアクション、コメディ、ドラマと幅広いジャンルで演技派ぶりを披露している。

出演作は他に『クライム・オブ・パッション』（84）『ナイルの宝石』（85）『ペギー・スーの結婚』（86）『スイッチング・チャンネル』（87）『偶然の旅行者』（88）『ローズ家の戦争』（89）『私がウォシャウスキー』（91）『心の扉』（92）など、また公開待機中の作品に『ネイキッド・ニューヨーク』（93）『アンダーカバー・ブルース』（93）がある。

CAST PROFILE





サム・ウォーターストーン

（ユージーン・サトフィン）

1940年11月15日、アメリカのマサチューセッツ州ケンブリッジ生まれ。エール大学演劇科を卒業後アメリカン・アクターズ・ワーク・ショップ、アクターズ・スタジオで演技を磨き、62年舞台デビュー。その後ブロードウェイに進出し、67年に『ニューヨーク泥棒結社』で映画デビューを果たした。74年『華麗なるギャツビー』で初の大役を演じ絶賛を浴び、以後知性派の名優として数々の映画、舞台、ＴＶに出演中。主な映画出演作には他に『青春の暴走』（77）『カプリコン1』（78）『インテリア』（78）『天国の門』（79）『バイオ・インフェルノ』（85）『キリング・フィールド』（85）『ハンナとその姉妹』（86）『セプテンバー』（88）『ウディ・アレンの重罪と軽罪』（90）などがある。



ミンク・ストール

（ドティ・ヒンクル）

1966年、ジョン・ウォーターズと出会い、彼の8ミリ映画『ROMAN CANDLES』に出演して以来、ディバインと共にウォーターズ映画になくてはならない存在となり、『モンド・トラッショ』（69・V）『マルチプル・マニアックス』（70・V）『ピンク・フラミンゴ』（72）『フィメール・トラブル』（74）『ディスパレート・リビング』（77・V）『ポリエステル』（81）『ヘアースプレー』（88）『クライ・ベイビー』（90）に出演、本作が記念すべき10本目のウォーターズ作品への出演となった。



マシュー・リラード

（チップ・サトフィン）

本作が初の大役となる彼はこれまでに『グーリーズ II』（87・ｖ）『TODAY AND TOMORROW』『BACK IN THE SADDLE 』『OH! MELODY』等の映画、『THE PROM KING』『 BLOOD BROTHERS』等のＴＶシリーズに出演、またニューヨークを中心に数々の舞台を踏んでいる。



リッキー・レイク

（ミスティ・サトフィン）

ニューヨーク生まれの彼女は幼い頃から女優に憧れ14歳でオフ・ブロードウェイの舞台に立ち、18歳の時にジョン・ウォーターズ監督の『ヘアスプレー』（88）の主演に抜擢された。その演技は批評家から絶賛され、映画は興行的にも大成功を収めて彼女は一躍注目の存在となった。その後、『ワーキング・ガール』（88V、高い評価を受けたＡＢＣのＴＶ映画『チャイナ・ビーチ』（88・V）、『私のパパはマフィアの首領』（89）『ブルックリン最終出口』（89）、『ベイビー・ケイクス』（89・V）、そしてウォーターズ監督の『クライ・ベイビー』（90）にたて続けに出演。近年約57キロのダイエットに成功した彼女は、現在昨年9月から始まったＴＶ番組『RICKI』のホスト役として活躍中。番組は新しいタイプのトークショーとして話題を独占、毎回驚異的な高視聴率を獲得している。



1993年5月14日金曜日。アメリカのとある閑静な住宅街。一見ごく普通の主婦ビバリー・サトフィンは歯科医の夫ユージン、大学生の娘ミスティ、高校生の息子チップの4人とごく平凡な家庭生活を送っていた。家族を仕事や学校に送り出した後の、彼女の朝の日課は近所の嫌味で無神経なオバタリアン、ヒンクル夫人へのいたずら電話で始まる。ビバリーはヒンクル夫人にありったけのワイセツな言葉を浴びせてストレスを解消し、爽快な気分で家事に臨むのだった。

その日は息子の高校のPTA面談日だった。その席で担任の教師スタビンズにチップがあまりにホラー映画に夢中なので一度精神科医に相談した方がいいと忠告されたビバリーは、にこやかな表情の奥に怒りの炎を燃え上がらせ高校の前でスタビンズを待ち伏せ、運転する車で彼をはね飛ばし、何度も何度も轢いて惨殺した。その夜、涼しい顔で夕食にミートローフを出したビバリーはユージンとの夜の営みにも積極的に燃えるのだった。

5月15日土曜日。ビバリーは久々に夫とバードウォチングに行くのを楽しみにしていたが、わがままな急患が入り中止になってしまう。むしゃくしゃした気分は近所のヒンクル夫人やアッカーマン夫人をからかっても収まらない。やがて彼女は蚤の市の会場で娘のミスティを振って別な女の子と楽しげにしているカールを見つけるとトイレまで尾行、火かき棒で彼を後ろから串刺しにして突き殺し、平然とその場を去るのだった。

スタビンズ殺害事件を捜査していた警察は目撃証言からビバリーを容疑者と断定した。また、ミスティとチップも自分たちの回りで起きた偶然とは思えない2つの殺人の犯人が母であることに薄々気づき始めていた。

その夜、食卓の会話でチップの友人スコットが、ビバリーを殺人犯呼ばわりしていたことが話題に上ると、ビバリーがキッチンから姿を消した。彼女がまた殺人を重ねるのではないかと疑った一家はすぐにスコットの家に向かい、サトフィン家を張り込んでいた警察もその後を追った。だが、ビバリーが向かったのはスコットの家ではなく、その日の朝、急患でユージンを呼び出したスタナー夫妻だった。彼女はハサミとエアコン装置を使って夫婦を惨殺すると家に戻り、ホッとして戻ってきた家族を迎えるのだった。

5月16日日曜日。サトフィン一家は教会のミサに向かって車を走らせていた。やがて、カーラジオから警察が発表した連続殺人犯の名前が響いてきた。その名はまさしくビバリーだった。彼女は何事もなかったかのように家族と一緒に礼拝を済ませると、警察の手を逃れて逃走した。ビバリーが次に現れたのはチップがバイトするビデオ・ショップだった。ある老婦人がテープを巻き戻さない上、チップを殺人鬼の息子とけなしたのを見るや、彼女はその後をつけ、その家の台所にあったラムチョップでビデオを見ていた老婦人を殴り殺すのだった。次に狙われたのはスコットだった。町中を包丁を持って追いかけられ、どうにかライブハウスに逃げ込んだ彼だったが、ビバリーに全身燃料をかけられ、演奏中のヘビメタ・バンドの火吹きパフォーマンスであえなく黒焦げになってしまった。

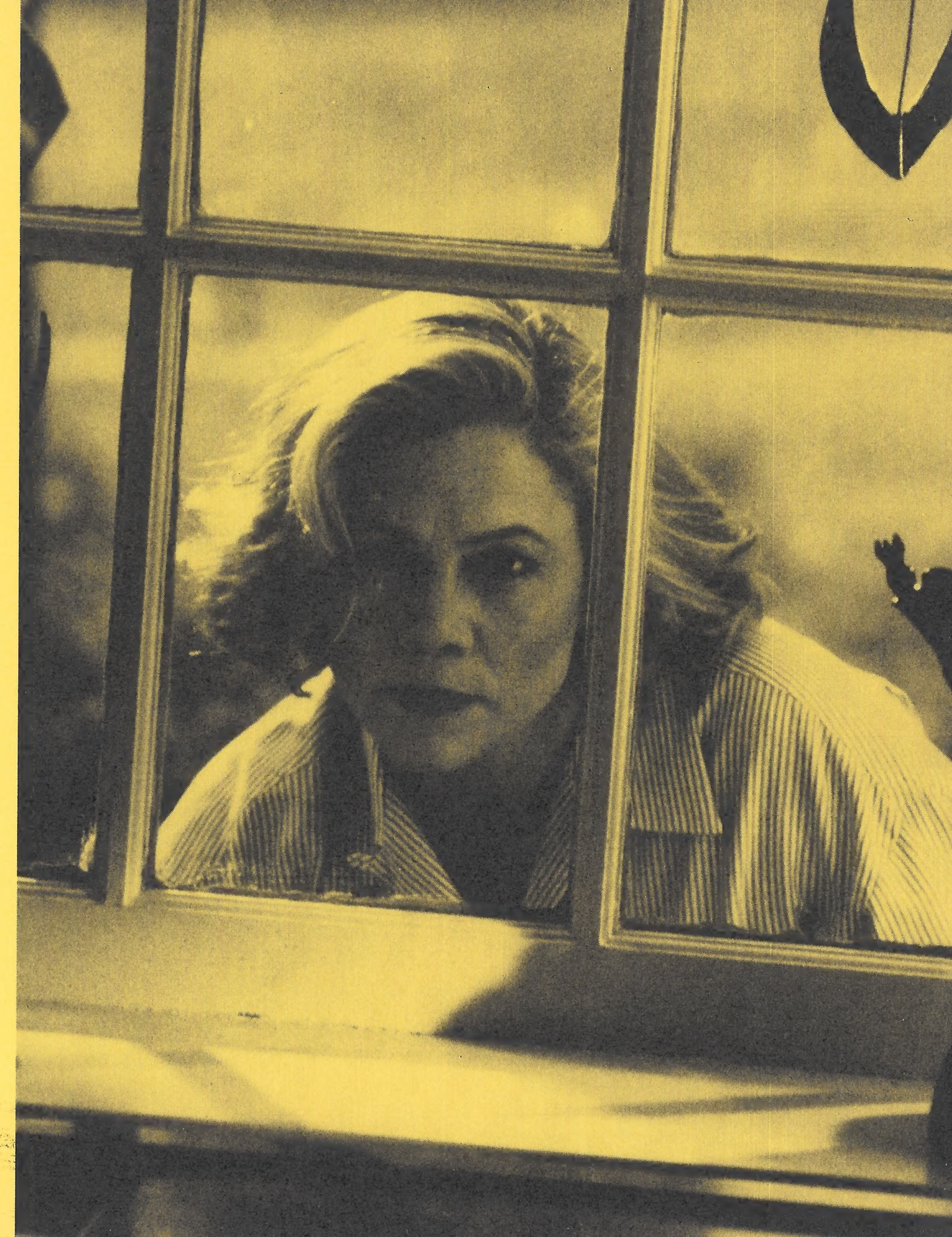
その直後、ついにビバリーは駆け付けた警察に逮捕される。

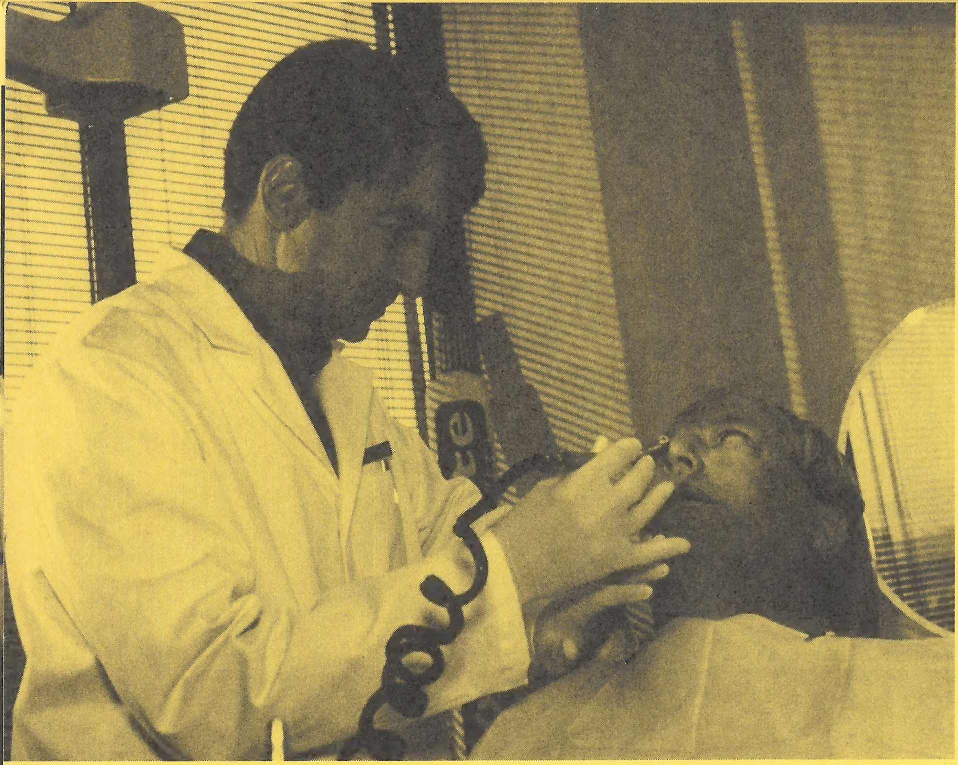
5カ月後。ビバリーの裁判が開始された。彼女は自分が精神異常で、だから無罪だと主張する弁護士をその場で解雇し、事件は完全な冤罪だと自分で弁護を始めた。やがて、事件は全米中の話題となり、ビバリーは“シリアル（連続殺人鬼）ママ”として一躍注目の存在となっていった…。

S T O R Y









シリアル・ママの歴史

柳下毅一郎

明るく楽しい正義の殺人鬼、ビヴァリー・サトフィンのおかげで、“シリアル・ママ”なる言葉も市民権を得たことであろう。殺人という言葉にはどうしても暗い陰がつきまとうが、そんなイメージを振り払ういい言葉だと思う。“シリアル・ママ”、“シリアル・パパ”とかわいらしく呼んでみれば、とかく敬遠しがちな連続殺人鬼にも親しみをもてるようになるかも知れない。親しんでどうするかは知らないが……

シリアル・ママのおかげで、これまでは日の当たらなかったママさん殺人鬼にもスポットが当てられるようになった。わかってみると、実は結構人殺しをやってるママは多い。いまや主婦売春ならぬ主婦殺人の時代といっていいかもしれない。映画にも出てくるテッド・バンディ（I Q.160のハンサム殺人鬼）、チャールズ・マンソン、（シャロン・テート殺害犯）、リチャード・スペック（一晩で看護婦8人を殺した『犯された白衣』のモデル）などの有名殺人鬼ほどよく知られているわけではないが、欧米には立派なシリアル・ママの歴史がある。とりあえずどんなのがいるのかと言うと……

“ナジレヴのエンジェル・メーカー”と呼ばれたのは第一次大戦直後にハンガリーの小村で活躍した主婦たちである。ここのママさんは戦時中の捕虜収容所キャンプでハーレムごっこを楽しんでいた。しかし、戦争が終わると夫たちが帰ってくる。自由の味を覚えたママには夫などただの邪魔者だった。とある助産婦がヒ素の毒を提供したおかげで、村では毒殺が大流行した。夫や両親、子供に隣人と目障りな人間は片っ端からあの世行き。殺人ゲームに参加した女性は50名以上に及ぶと見られている。結局38人が逮捕され、8人が死刑に処された。

1920年から30年以上の長きにわたって結婚しては夫を殺していたナニー・ドスは愛に生きる女性だった。夫も子供もいるママであっても、愛の炎は消せなかったわけである。最初の結婚は20年。しかしナニーは「自分にもっともふさわしい相手」を求めて情事をつづけた。夫とはすぐに別れた。ナニーはすぐ再婚、二番目の夫は病死した。さらに3人夫と死に別れたが、5人目でさすがに医者に怪しまれてしまった。で、逮捕。法廷で保険金目当てだろう、と糾弾されたナニーは目を吊り上げて怒ったそうな。「わたしは誰よりも自分にふさわしい夫、生涯一度のロマンスを探していたんです」

これ以外にも近所の犬や夫の死を次々に“予言”したティエリー・ガビューレック、預けられた子供を片端から絞殺しながらも、裁判で2度も無罪になった子守り女ジャンヌ・ウェバーなど、興味深いシリアル・ママは数多い。世界のシリアル・ママたちは、今、この瞬間にも愛と正義と真実とゴミの分別収集のために戦っているのだ。



JUROR #8 IS WEARING WHITE SHOES AFTER LABOR DAY.

Is'nt this 4215 Pussy Way?

Listen to their call. Oo-ee! Oo-ee!

Now, let me check the Zip Code, 2-1-2 fuck you!

Chip, the only cereal I know anything about is Rice Krispies!

Chip... you know how I hate the brown word.

Are you a serial killer?

Is this the Cocksucker residence?

Rewind!

Are those pussy willows?

I'll get you pussy face.

You can't wear white shoes after Labor Day.

Bon appétit.

Listen to your fifty mouth, you fuckin' whore!

Hello, Jury people! I'm Beverly Sutphin.

Oh, I like your jacket!

Suzanne Sommers! This is my bad side!

Mrs. Ackerman. Do you recycle?

We find the Defendant...not guilty of all charges.

「これは本当に素敵な理想的な一家についての映画なんだ。」と語るのは監督のジョン・ウォーターズ。「彼らは素敵な家に住んでいて、両親は子供を思いやり、リベラルな視点を持っている。でも彼らにはほんの一つだけ欠点があるんだ。そしてその欠陥こそ私がどうしようもなく惹かれる部分なんだ。」彼はまた、この善良な市民の暗い側面を描くブラック・コメディを製作するにあたり、彼が日常で実践している人間観察が大いに役立ったとも語る。「誰もが生活の中に秘密の部分をもっているけど、その暗い部分が社会の機能を維持しているんじゃないかと思う。つまり、誰もが人は基本的に異常だってことを知っているから、完全な狂気に陥らないで済んでいるんだよ。」

本作では現代アメリカにおける犯罪とメディアの関係が鋭く風刺されているとウォーターズは語る。「あなたが今何か犯罪を犯せば、エージェントが飛んできて次の週にはあなたはTVに出演、やがてその一部始終がベストセラーになり、映画になるだろう。そんな現象を私はユーモアと皮肉をたっぷりに見せようと思ったんだ。でも、私自身その現象に一役買っていることも事実なんだ。なにしろ私はその手の映画や本に目がないし、TVの裁判番組は欠かさず見ている方なんだから。」

「私は死刑反対論者だ」というウォーターズ。彼は実際の猟奇連続殺人鬼についてはそれほど興味が無いようだ。「私の友人の一人は死刑囚で、私は彼女を救おうと努力している最中だが、実際の殺人事件そのものを私はちっとも面白いものだとは思わない。私が面白いと思うのは殺人事件によって人が有名になってしまうという現象なんだ。」

『シリアル・ママ』は今までのウォーターズ作品と同じくボルチモアで、多くの地元のスタッフを使って撮影されたが、その撮影はこれまでで最も優雅なものだった。ウォーターズが通常の週6日の撮影で8週間ではなく、週5日の撮影で9週間というより余裕のあるスケジュールを実行、スタッフとキャストはより人間的な生活をエンジョイすることができ、月曜日の撮影現場では「週末は何をしたんだい？」という普通では考えられないような会話がスタッフの間で交わされていたという。このユーモアに満ちた傑作は、そんな余裕のある現場だからこそ生まれたのである。

ジョン・ウォーターズにとって多くが初体験だった本作の撮影の中で、彼が最も興奮したのはやはり、ハリウッドのスター・リストでもAランクに属する大女優キャスリーン・ターナーとの仕事であった。「もう、彼女以外にはまったく考えもつかなかったんだ。彼女は最初からまったく私の想像していたとおりに演じてくれたんだ。正直いうと、脚本を書いている段階ではジュリー・アンドリュースをイメージしていたのだが、一度キャスリーンと会って話をしてからは他にはまったく目もくれなかった。初めて画面の中で包丁を手に道路を走る彼女を見たときには、夢が実現したような、まるで天国にいるような気分だったよ。」一方、ターナーも本作の撮影を「最高に幸福な体験」だと絶賛している。

本作のスタッフの多くがジョン・ウォーターズとは古い付き合いで、数多くの作品で共同作業を体験している。また、外見は“普通”を目指したこの作品、常連スタッフにとってはこれまでとはひと味違った仕事となった。『マルチプル・マニアックス』以来の付き合いとなるプロダクション・デザイナーのヴィンセント・ペラーニオは語る。「これまで多くのウォーターズ映画に携わってきた。今まではただ変テコにしていれば済んだんだ。ところが今回はとにかく普通に見せなくちゃいけない。なんだか凄く変な気分だったよ。」



PRODUCTION NOTES

勤勉なバッド・テイスト主義者の最高傑作

川勝正幸

1．ある日、昼下がりのワイドショーで。

観そこなって残念！ “以下、友人談”なのだが、昼下がりのワイドショーにおすぎさんが出て、「『シリアル・ママ』は最高のコメディなのよ！」とベタ誉め。画面にはけっこうヤバめなシーンが次々と流れ、局アナが何度かおずおずと「これはもしかして変な映画じゃ……」と口を差しはさむのを、「いや、コメディですのよ」の一言で押し通したという。

これはおすぎさんの気骨を示すエピソードであると共に、『ピンク・フラミンゴ』時代からのジョン・ウォーターズ・ファンとしては、ビックリ仰天有頂天！ 日本全国の主婦が彼の映像を目の当たりにする時代になったという、正に“白日夢（DAY DREAM）”的な出来事だった。

2．表現に貴賤も規制もないと教えた映画

『ピンク・フラミンゴ』（'72）を初めて観たのは70年代半ば、僕が20代前半の頃。場所はアートシアターJUKUという、“アングラ”専門の小さな映画館だった。そこの目玉作品だった『フリークス』（'32）や『スコーピオ・ライジング』（'64）にも度肝を抜かれたが、『ピンク～』の後遺症が一番キツかった。

それはもちろん、「ディヴァイン（1945-88。後期エリザベス・テイラーのゲイ・ヴァージョンか？）が犬のウンチを食べちゃう」とか「アヌスがソング＆ダンスする男が登場」といったシーンのせいもあったが、むしろ“表現に貴賤も規制もないとする強い意志”を画面から感じたことのほうがデカく、終映後、趣味の善し悪しの座標軸がズレた僕は、頭グラグラのまま夜の新宿の町をさまよった。

3．“趣味の良い悪趣味（バッド・テイスト）”の持ち主

70年代のジョン・ウォーターズは、有名になりたい女＝ディヴァインが運命にもてあそばれた末、電気椅子送りになる『フィメール・トラブル』（'74）、殺人とレズと血とゲロとネズミのむし焼きと切断されたペニスにまみれたサイコ版不思議の国のアリス『デスペレート・リビング』（'77）を発表。僕は彼を“悪趣味の国から悪趣味を布教に来た変質者”だと信じていた。『水戸黄門』の悪代官役の俳優を悪い人だと思い込むお年寄りを笑えぬ。

ウォーターズが“スーツに身を包んだボルチモア在住のチョビひげの紳士”で、“趣味の良い悪趣味（バッド・テイスト）”の持ち主だと分かるのは『ポリエステル』（'81）を観てから。家庭の平和を願う平凡な／体重は非凡な主婦＝ディヴァインが、根本敬氏の漫画の主人公＝村田藤吉ばりに酷い目の連続にあう、アメリカの中産階級の美意識をコケにした作品である。

“無意識過剰のヒト／モノを受け手のクリエイティヴな見方によって楽しむ悪趣味（バッド・テイスト）”を武器に、彼は映画を撮っていたのだ。僕の知り合いがバリー・レヴィンソン（『レインマン』'88の監督）に「ウォーターズと同じボルチモア出身ですね」と言ったら、嫌な顔をされたそうだが、そんな名士がいる“ご清潔なボルチモア”の、しかも中産階級出身であることへの愛憎がウォーターズ映画の原点らしい。

4．普通の映画を演じた『シリアル・ママ』

ウォーターズ組の看板女優＝ディヴァインの死は痛いものがあったが、『シリアル・ママ』（'94）の成功は、キャスリーン・ターナーのキャスティングにある。テーマ的には『フィメール・トラブル』と『ポリエステル』を足して縫った古い袋に、新しい酒を盛って、裏返しにしたような映画なのだが、今回はこの“裏返し”がポイント。ハリウッドのメジャー感ある女優が“家庭では良きママ”を演じることで、『シリアル・ママ』は普通の映画を演じることができたのだ。誰もが日常生活の中で些細なことから抱く一瞬の殺意、そして、それを押し殺さず実行に移す“正義のママ”をウォーターズはラブリーに描く。バリー・マニロウとL-7が共存する世界……。

さて、“新しい酒”とは、オリヴァー・ストーンが『N B K（ナチュラル・ボーン・キラーズ）』で描こうとして失敗した、連続殺人犯がメディアによってスーパースターになる過程のリアリティである。シリアル・ママの××が決定して、うれしいような悲しいような家族の表情を忘れずに描く細やかさ！ ウォーターズには犯罪への愛と、照れずに書けば、映画への愛がある。

こうやって、ウォーターズの映画史をおさらいしていて、気付いたことが……。彼のエッセイ集『クラック・ポット』（原著'86／伊藤典夫訳／徳間書店'91年刊）に好きだと書いているヒト／モノが、しらみつぶしにウォーターズ映画に反映されているのだ。映画興業自体の仕掛けへの尊敬（リスペクト）→『ポリエステル』の匂いの出るカード（オドラマ・カード）、ボルチモアの60年代のダンス・パーティ番組への郷愁（ノスタルジア）→『ヘアスプレー（'87）』、犯罪研究熱→『シリアル・ママ』。形になっていないウォーターズの愛の対象は、自ら“恥ずかしい趣味”と紹介している“芸術映画鑑賞”のみ。が、勤勉な人のこと。とりあえず、今回は『インテリア』（'78）の名優＝サム・ウォーターストーンの起用にとどまったが、いずれマジな芸術映画を作るかもしれない。



「ヘアスプレー」

財団法人川喜多記念映画文化財団提供



シリアル・ママ





Dr. Sutphin, is your wife mental?









そして女子供は勝利する

（偏）愛のために　1950s——1990s

赤坂真理

本稿のタイトルは最初、「コミューンからコミュニティへ」だった。シリアル・キラーの系譜を、有名なチャールズ・マンソン（※1）からこの「シリアル・ママ」ビヴァリー・サトフィンまで語ってみようとしたもので、時代としては1960年代後半から現在までになるはずだった。

それがなぜ、冒頭のごとくになったか？

理由は、ある。

『シリアル・ママ』の中の、あるディテイルがわたしの頭から離れなかったためだ。記憶の中にものすごく大事にしまってあるものを、予期せぬところで見たのに似ていた。そのディテイルは、あっという間に**ディテイル**くらいになり、するとどうしてもそのことを言わなければならないようなメンタリティになってきて、強引に話の枠を広げることにした。この心の動きは、理性ではなくほとんど愛で、しかも、偏愛である。けれど、たかがディテイルのために全体を組み換えることあるいは覆すこと、これは、心理学的に説明するならフェティシズムの作用であり、そう言うとなんとなく通りもいいではないか？

いや実はこういうことは、ばかばかしく見えて重要かもしれない。なぜなら「カルト的」と一度でも評された事のあるものに共通した質こそ、この、フェティシズムであるような気がするのだ（実は今、した）。ジョン・ウォーターズはまさにカルトと呼ばれてきた人だ。デイヴィッド・リンチのある時期もそうだった。ファッションでわかりやすい人を一人挙げるならジャン・ポール・ゴルチェ、そしてゴルチェを衣装に登用したピーター・グリーナウェイ監督も、立派なフェティシストだ。彼らの作品には、ディテイルが横溢している。ゴルチェの靴が、ときに特徴的なヒールのためだけに存在していることを、思い出せる人は思い出そう。おおヒールといえば、『ハイヒール』を忘れることはできない。有名な女優の娘である主人公は、通りに面した半地下の部屋に住んでいた少女時代、見上げる小さな窓に切り取られたハイヒールを母親そのもの女そのものと思っていた——。部分と全体の同一視。まさにフェティシズムの定義そのものを作品化したような映画だ。そのアルモドバル監督は近作『キカ』で、衣装の一部をジャン・ポール・ゴルチェに依頼している。類は友を呼ぶ。どんどん呼ぶ。ゴルチェついでにマドンナはどうか？

マドンナ自身はフェティシストではないだろう。ただ、全くの別人格、別時代の個人になるためには、全身を完璧なディテイルで固める必要がありディテイルこそがそのさい命であることを、彼女はよく知っていた。

ウォーターズ監督の前作『クライ・ベイビー』（1990）はディテイル爆発の映画だった。それもそのはずだ。映画の背景となった1950年代半ば（1954）とは、その以前には存在しなかった“ティーンエイジャー”という年齢区分が初めてできた時代だった。ティーンエイジャーたちは、肉体と想像力のすべてを駆使して、大人とは違う自分たち、そして子供とも違う自分たちを表現しなければならなかったのだ。

ティーンエイジャー同士の中にも、とうぜん、差異は作られた。それは表面的には、清潔（スクエア）な外見と不良（ドレイプ）の外見、として出たのだが、選択はもっと本質的だった。

つまり13歳から19歳までのティーンエイジを、新しい目覚めた人として生きるか、それとも従来ずっとそうであったように、良識ある大人になる迄の前段階として過ごすか？

「だってティーンエイジャーなんだ!!」

とジョニー・デップ演ずる“クライ・ベイビー”が訴えるとき、だからその言葉は、子供っぽく舌足らずでじっさい大人を説得することもできなかったが、彼の全存在の提示だった。ライダース・ジャケット、そのタイトさ、靴のつま先のかたち、オールバックにつくった髪から額に落ちる、たった一筋の濡れて光る前髪に至るまで、すべてのディテイルに、大げさでなく個人の尊厳がかかっていた。

1962年ボルティモアが舞台の『ヘアスプレー』（1988）は、ウォーターズ監督がメイジャーにも認められるようになった初めての作品だが（※2）、ここには50年代半ば以来のディテイルがさらに先鋭に差異化されていく過程が描かれていた。ヘアスプレーとは、目立つために髪をどんどん高く上げていき、それを固める目的でティーンエイジャーになくてはならなくなった小道具だ。ディテイルへの愛着は、小道具の名をそのままタイトルにするセンスにも現れている。

作品のインスピレーションの大元であるＴＶ番組“アメリカン・バンドスタンド”について、片岡義男が『ぼくはプレスリーが大好き』の中で次のように書いている。

> 1957年、このテレビ・ショウは、全米にネットされることになり（※3）、ホストは交代し、ＤＪをやっていたディック・クラークが選ばれた。そこに登場する若者の服が全米で流行になり、踊りが真似されてこれも生活の一部になるにおよび、遠くテキサスからこの番組に出演するためヒッチハイクでやってくるティーンエイジャーがあらわれるほどになった。面白いのは、踊りのヴァリエーションが、週のはじめと終わりではもう違っている、という事実だった。興味を持たない大人の目で見ると同じような踊りなのだが、それぞれに、明確にちがっている部分があったのだ。
>
> ステップのどこがちがうかは、しかしさほどの重要事ではなかった。
>
> 大切なのは、最も新しいステップでロックンロールに反応することだった。新しい踊りを知っているということは、ロックンロールに対して全生命的でしかも真剣な反応をしていることの証明だった（※4）

『ヘアスプレー』はまた、ひとつの価値が爛熟して別の価値へと移行しようとする、瀬戸際の時代の話でもあった。

『クライ・ベイビー』において、ただ大人に反抗するだけに見えたティーンエイジャーのリーダーは、『ヘアスプレー』のトレイシーになると、身近な大人に反発することを超え、同じく身近な人種差別問題を通して、より大きな権力に直面する。はっきりと、政治性の始まりをトレイシーは示していた。後の世代の人間が「60年代的」と漠然と感じる価値の、それは芽生えだった。逆に言うとそこまでは、ぎりぎりのところで未だ50年代的な要素が多かったのだろう。

トレイシーが、来るべき時代にちらっと触れるシーンは、やはりディテイルをうまく使って描かれている。黒人居住地区に遊びに行って夜遅くなったトレイシーらを、ママたちが車で迎えに来て、帰りたくない一心のトレイシーらは近くの家に逃げ込む。そこでヒッピーの先駆けに、出会うのだ。前髪を目のラインぎりぎりまで厚く下ろした、ストレートの黒い長い髪。トレイシーは仰天して、言う。

「どうしてあなたの髪、そんなに……平らなの？？」

初期の作品には、誰でもその人の質がごっちゃなまま全部出る。そこからするとウォーターズ監督は60年代後期的な人だと私は思っていた。風景の荒涼とした感じとか、トレイラー・ハウスで全米を渡り歩くオカマとそのファミリー、レズビアンのカップルに赤ん坊を売る悪辣な夫妻、といったアイデアなんかが。このことは、監督自身の世代に照らすとさらに納得が簡単である。だから『ヘアスプレー』以降の作品を見るたび、ジョン・ウォーターズにはこういうカラフルでポップな好みもあるんだなあ、といちいち新鮮に驚いていた。

しかし逆かもしれない。ジョン・ウォーターズは、ずっと50年代的なものに憧れ続けてきた人かもしれない（と、やっぱり今、思った）。

1966年から88年までの長きにわたって彼のヒロインであり続けたディヴァイン（※5）に、このことはより端的に集約されているように思う。ディヴァインは男だったが、女優だった。つまりはファグ（オカマ）であり、ドラッグ・クイーン（※6）というオカマの一系譜を、最大限に誇張した姿かたちをしていた。オカマであることを芸の域にまで高めた存在というのは、性の解放が叫ばれた60年代後期の象徴と言える。しかし、ディヴァインを一目でも見ればわかるが、その豊満な肉体からそのファッション、メイクアップ、ヘア・ドゥー、細かくはゴールドのピンヒール・サンダルズ、ぜんぶ60年代後期的とはいいがたい。彼女は明らかに前時代の女たちから、ディテイルを引用している。それは同時代の本当の女たちが、多くは捨て去ろうとしたものだ。女、それも古いスタイルの女に憧れ続ける力とその強さが、ディヴァインの存在を感動的にしていた。『ヘアスプレー』で彼女の演じたママは、だからこそステレオタイプと呼べるまでに完璧に、ママだった。

実は、『シリアル・ママ』で私の頭から離れなくなったあるディテイルというのも、ジョン・ウォーターズの50年代からの引用である。彼のような人にとって、好きなものとは、何を描こうが出さずにはいられないものらしい。ジョン・ウォーターズはきっと、ずっと、50年代に愛着し続けている。

それはベティ・ペイジという人だ。（※7）

ビヴァリー・サトフィンの息子チップの友達、スコティが読んでいる雑誌の表紙に、一度だけ出て来た。

少しだけ書いておく。ベティ・ペイジは、諸説あるが1925年、ナッシュヴィルに生まれた。1950年ころにニューヨークでアーヴィング・クロウという男に見い出され、モデルに、主にボンデージ写真のモデルになった。

ボンデージ写真は、おおむねメイル・オーダーで売られた。ヌードやポルノを志向しないボンデージ写真は、セックスに関連した商品としては、ある心の傾向（偏り）を持つ人、限られたマーケットに向けられていた。しかしベティ・ペイジの持ったトータルな影響力は小さくない。彼女に天啓を受けた人に、1955年に『プレイボーイ』を創刊するヒュー・ヘフナーもいたのだ。

アメリカの社会は基本的に、普通でないものを容認しない質を持っている。セックスの表現でいえば、男女で、ペニスの挿入があって男が射精に至るというものは、みんながすることで、したがって許され1970年のポルノ解禁へとも向かうのだが、アーヴィング・クロウの商売は、1960年代半ばにほぼ完全に潰されてしまった。その発端は、メイル・オーダーされた写真が誤った住所に配達され、気づかずに開けた人が、おののいて最寄りの警察に駆け込んだことだった。

スコティの読んでいた雑誌は、ベティ・ペイジのファン・マガジン『ベティ・ペイジズ』（※8）である。ポルノがいくらでも手に入るこの時代において、スコティの欲望はオルタナティヴである（※9）。このファンジン（※10）は現在もニューヨークで発行されている定期刊行物で、世界のどこからでも、メイル・オーダーで購読することができる。

ビヴァリー・サトフィンが、死刑囚の美男シリアル・キラー、テッド・バンディと“文通”していたことを（再び、思い出せる人は）思い出そう。

セックスと犯罪は、たとえ全くの別件であっても、なぜか似た場所に現れる。

*

男のシリアル・キラーには歴史的に有名な人が何人かいて、彼らがなぜ有名かというと、特徴的な、一種美的とさえいえる手口を重ねたからである。または殺人がある大きな目的のためで、その目的というのがショッキングだったためである。

前者のグループに、切り裂きジャック（※11）がいる。後者には、『羊たちの沈黙』のモデルともされるエド・ゲイン（※12）。チャールズ・マンソンと彼の結社“ファミリー”は、複合系だろう。

女はどうか？　つまらない。ナニー・ドスは「真の夫を求め」結婚した相手を、幻滅するたびつぎつぎ殺し5人目でバレたという人だ。複数の夫殺しの女、というのを数え上げると、女のシリアル・キラーのかなりの割合が埋まることが途中でわかって嫌になった（※13）。女たちの動機は、どちらかというと具体的で、本人の生活に密着している。ビヴァリー・サトフィンも例にもれず、自分と自分の家族の幸せ、あるいはコミュニティの幸せを、おびやかす者には血の雨を！　というのが彼女の掟だった。この哲学は明快だが、前述のような男たちのそれに比べると、いかにもドラマ性、カルト性を欠いている。しかしビヴァリーは、人気者になった。それこそドラマ化が決定するほどに。秘密は何か？

『シリアル・ママ』の半分は法廷劇とも言えるが、ここに平凡な主婦の彼女のアメリカン・ヒロインたりうる資質を見ることができる。

「わたしを見て、**ごく普通の人間、**あなた方と同じの」

と、ビヴァリーは言った。彼女は明らかに、アメリカ社会の、普通でないものを容認しない質を逆手にとっている。そう考えるのなら、彼女が上の言葉を法廷の誰に向けていたかははっきりしている。陪審員団である。陪審員団とは、「良識」が服を着ていると期待された人々であり要はそれだけの人々だ。アメリカ合衆国が裁判に採用する陪審員システムとは、「世間の目」を法廷に持ち込むことを意味する。世間の目に、専業主婦ほど敏感な存在はない。世間のツボに、これほど精通した存在もない。

しかし最も特筆に値するのは、彼女が自分を弱いものとして動機に同情を求める方法を取らず、あくまで「普通」で押して、原告側を、相対的に「異常」と認知させたところである。アメリカ性を極度に突き詰めた結果としての、反アメリカがここにある。またこの反アメリカは、性質上、広いレンジに受け容れられる素地を持っている。

そうしてビヴァリーは、笑顔で再びコミュニティへと戻って行った。チャールズ・マンソンは、死刑を宣告されながらも未だ獄中で、今年60歳になる（※14）。メタル系バンドのガンズンローゼズ（※15）は94年、マンソン作詞による殺人の精神性を謳った歌をアルバムに収め、有名な犠牲者シャロン・テイトの遺族から抗議を受けた。このトラックは、初回プレス分を除いて、ＣＤから永遠に削除される。

脚注

※1　どのくらい有名かというと、『ナチュラル・ボーン・キラーズ』に、90年代のスーパー・スター・シリアル・キラーズ、ミッキー&マロリーの視聴率もマンソンにだけはかなわなかった、とある。

※2　比べる人はいなかろうが、ジョージ・ルーカスとジョン・ウォーターズは、同時代の表裏である！　ジョージ・ルーカスを世界に認めさせたのは『アメリカン・グラフィティ』であり、１９６２年が舞台で、やはり綿菓子のような女の子が特徴的なキャラクターだった。二人はそれぞれ45年と46年生まれ。

※3　始まったのは１９５２年、フィラデルフィアのＡＢＣテレビ。

※4　これにジョン・ウォーターズ自身の回顧を照らしてディテイルを充填しよう!!　ただしジョン・ウォーターズを育てたあのボルティモアでは「アメリカン・バンドスタンド」の放映はなく、それは「バンドスタンド」が全米ネットになる前からローカル局チャンネル13に「バディ・ディーン・ショウ」があったからだ（１９５７-６４）。「国民の大半を育てたのが「アメリカン・バンドスタンド」ならボルティモアっ子は同じころ例のとおり、怪しげな自前の番組を持っていた」、とウォーターズは常に作品の舞台となってきた郷土への偏愛を語っている。では、Hit it!

「若者はこの番組を通してティーンエイジャーとはどういうものかを学んだ。毎日学校が終わると自宅にかけもどり、ＴＶを見ながらベッドの支柱や冷蔵庫を相手にダンスをするのだ。バディ・ディーン・ジルバが踊れないやつは（女の子が体を回すたびに、こころもちうつむくのですぐわかる）、社会の除け者だ。といっても、ほとんど毎週新しいダンスが出てくるので、毎日見て追いついていかなければならない。気が狂うかと思えるほどだ。マッシュポテト、ストロール、ポニー、ワドル、ロコモーション、バグ、ハンドジャイブ、ニューコンチネンタル、そして極めつけはこの街で生まれ、全米に広まっていった複雑なラインダンス――マディソン」

※5　１９４５-１９８８

※6　ドラッグ、とは女装の、の意。自らドラッグクイーンとしてパフォーマンスもするアーティストの古橋悌二（ダムタイプ）は、影響を受けたＮＹのドラッグクイーンたちについて次のように言っている。「ドラッグクイーンの人たちって、芸術家なんかより尊敬すべき人が多い」

※7↓



※8　ベティ・ペイジのペイジと、本の頁をかけたタイトル。類似刊行物に『ジミー・ペイジズ』（ウソ）。

※9　スコティがマスターベーションの友にしていたのは、たぶんラス・メイヤーの映画のヴィデオと思われるが（間違ってたらごめんね）、このラス・メイヤーとは、ジョン・ウォーターズが最も敬愛する映画監督の一人と公言してはばからない、インディペンデント映画界の巨匠である。50年代からセクスプロイテーションという一ジャンルを輝かしく築いた。セクスプロイテーションとは「性を売り物にする」という意味の造語だが、それはポルノへと向かった時代の趨勢とは一線を画していた。現在の平均的なアメリカ人からすれば、性器もあからさまなセックスもないそんなヴィデオで至福のマスターベーションにひたれるスコティは、驚異かもしれない。

ともかくもこれでメイヤーに興味をもった人は、ヴィデオ上映会を開いている「ザ・ディープ」に連絡してみよう。電話は東京03-3463-1907。

ところでスコティとチップの好みは、全然違うようで共通点があった。どちらにも一定の様式美があるところだ。二人の部屋は、ディテイルの違いにもかかわらず、空気が似ていた。後半に出てくる、ヘヴィ・メタルのヘヴィな愛好キッズの部屋もあんなだ。

※10　ファン・マガジン・マニアはこう言う。

※11　「シリアル・キラー・シリーズ」というカードが、アメリカで実際にスナック菓子のおまけについていたことがあって、今ではコレクターズ・アイテムと化している(らしい)。『アダムズ・ファミリー2』で、サマー・キャンプで浮きまくるアダムズ姉弟とその友人一名が、こそこそ見せ合いしていた。これによると、切り裂きジャックは最も希少価値のついた一人だ。

※12　右で希少価値として挙がったのは二人だったのだが、そのもう一人、「ゾディアック・ガイ」と聞こえる人は、字幕に「レクター博士」とあるところを見るとこの人を指すのかもしれない。この人エド・ゲインを直接モデルにした映画『ディレンジド』は、彼の食人の欲望にせまっている。

しかしゾディアックという名のシリアル・キラーも実在していて、殺した数は、公称5人、自己申告で37人。

※13　再び『アダムズ・ファミリー2』によると、カード・シリーズに収められた黒クモ女（黒き未亡人）というのもこの系統らしい。ただし彼女はおそらく夫の財産ないし保険金が目当てであった。本文中のナニー・ドスは、こういう女たちと一緒にされるのがよっぽど心外だったらしい。法廷で次のように言ったと記録がある。「私は生涯に一度のロマンスを探していただけなんです！」

黒クモ女に、アダムス弟はエイミー・フィッシャーのカードで対抗した。この人たちの資料はない。

※14　マンソンは１９７１年に死刑の宣告を受けた。翌72年、カリフォルニア州は殺人犯に対しての死刑の廃止を決定した。

※15　この脚注は、やはりくだらない事で締めくくるのがジョン・ウォーターズへの愛というものだろう。GUNS N' ROSES (GUNS AND ROSES)を、なぜカタカナで「ガンズン」と略し表記する人はいるのか、それも多いのか？　ガンジーないし鑑真のようと、思わないのか。大学生のころケニアのフィールドワーク帰りだった若い講師の先生が、「喫茶店でおねえさんが『キリマンひとつ』なんて言っていると思わずつかまえて説教してしまう。あれは『キリマ・ンジャロ（ンジャロ山）』であって、強いて略すならキリマかンジャロなのですっ！」と憤激しつつ語っていたが、同質のものを感じる。







シリアル・ママ



シナリオ採録

細川直子

――これは実話である。この脚本は法廷証言や多くのインタビューを基に作られている。登場人物の幾人かは仮名にしてある。現在のところ、被害者は誰一人として倍賞金を受け取っていない――

●サトフィン家の朝。歯科医のパパ、ママ、息子のチップ、太めの娘のミスティー――家族4人のなごやかな朝食。ガムを噛む娘をママが注意する。

ママ「ガムはベタベタくっついて大嫌い」
ミスティ「（ガムを口から出し）ごめんなさい（レコードを出し）チップ、これノミの市で50セントで売れるかな」
チップ「1ドルだ」
ミスティ「カールは無理だろうって」
ママ「カールって誰？」
ミスティ「男の子よ。これから迎えにくるわ。キュートよ」
ママ「キュートなだけじゃね」
ミスティ「一緒に大学へ行くの」
パパ「ミスティに恋人ができてよかった」

ママはテーブルの上を飛ぶハエが気になってしょうがない。

パパ「（新聞を見て）“絞殺魔が獄中で涙の卒業式”だと」
ママ「感動的」
パパ「感動的？死刑にすべきだ」
ミスティ「彼は人殺しよ」
ママ「不幸な人」
チップ「パパ、連続殺人犯の写真見た？」
ミスティ「ビデオ店で働きすぎね」
パパ「勉強もしっかりやれ」
チップ「成績いいぜ」
パパ「今日、ママは先生との面接がある」
チップ「あの先生は嫌いだ」
ママ「そんなこと言っちゃいけません」

ママが狙いを定め、ハエ叩きをピシャリ。パパの目の前でハエはペシャンコに潰れる。

ママ「（すっきりした顔で）卵、食べる？」

他の3人はハエの死骸にゲッソリした顔。――
1993年5月14日、金曜日、7：26　A.M.――
そこへ、2人の刑事が訪ねてくる。

パイク「パイクとグレーシー刑事です」
パパ「事件でも？」
パイク「そうじゃない」

ミスティの流し目にパイクがニヤける。

ママ「（ティッシュをグレイシーに渡し）わが家はガム厳禁ですの」
グレーシー「失礼。実は、卑猥な電話や郵便物にドッティ夫人が悩まされています」
ママ「友達よ」
パパ「ご近所だ」
グレーシー「（手紙を見せ）心当りは？」

手紙は文字を切り貼りして、“死ね、チンポ吸い”とある。

ママ「まあ、いやらしい」
チップ「見せて」
パパ「ダメだ。子供が見るものじゃない」
ママ「こんな言葉は口にしたこともありません」
パパ「女性にはできん」
ママ「醜いことはごめんだわ。小鳥を見て。あのさえずり」

ママは窓辺の籠の鳥を見て、ウイ、ウイと鳴き真似を始める。バーディとスコッティが車で迎えにくる。それを潮に、一同は外へ。

パパ「（刑事たちに）バーディはホラー映画マニアだ」
バーディ「（ミスティに大きな箱を渡し）このピーウィー人形、ノミの市に出して」

そこへ、白いジープが来る。カールが降りてきて、ママに握手の手をさしのべる。

カール「サトフィン夫人、カールです」
ママ「娘の恋人ね」
カール「ただの友達です」
ミスティはがっかりする。
ママ「刑事さん。（スコッティをさし）またシートベルトをしてないわ。早く逮捕して」
車に戻ると刑事たちは、
グレーシー「まったく脳天気な母親だ。ウイウイウイか」
パイク「明るくて模範的な女性じゃないか」
●9：37　A.M.　寝室。ママは、声音を変えてドッティに電話する。
ママ「チンポ吸いはいるか？」
ドッティ「もう電話しないで」
ママ「プッシー街4215番地だろ」
ドッティ「雌犬！」
ママ「郵便番号は212だろ、クソ女」
ドッティ「警察が電話を傍受してるわ」
ママ「じゃ、なぜ駆けつけない、変態ババア」
ドッティ「クタバレ！」
ドッティは電話を切る。満足そうなママ。階下では、訪ねてきたローズマリーがママを捜し、階段を上ってくるところ。ママはしつこく、もう一度ドッティに電話する。
ドッティ「くどいわね！」
ママ「（普通の声で）何ですって？こちらは電話局です。イタズラ電話がかかるとか」
ドッティ「そうです。頭が変になりそう。番号を2度も変えたのに。お願い、助けて」
ママ「相手はどんな汚い言葉を？」
ドッティ「とても口じゃ言えません」
ママ「正確に言っていただかないと」
ドッティ「（決心し）チンポ吸いと」
ママ「（急に恐ろしい声で）淫売女め！」
ドッティ「クソッタレ！」
ママ「売女！」
ドッティ「アバズレ！」
双方ともガシャンと受話器を置く。入ってきたローズマリーはビックリ。
ローズマリー「ビバリー、大丈夫？」
ママ「ええ、もちろん（裁縫箱を受け取り）覚えていてくれたのね」
ローズマリー「もちろんよ。叫び声が…」
ママ「ケーブルＴＶよ。ドッティの話を？」
ローズマリー「聞いたわ。恐ろしい。うちに警察が来たの」
ママ「誰がドッティに、あんな電話を？」
●3：15　P.M.　チップの学校へ車ででかけるママ。途中、庭で植木いじりをするドッティを見て手を上げ、ほほ笑みかけていく。が、心の中にはマーケットの駐車場で空きを待っていた時、ドッティに横入りされて超ムカついた思いが…。
●3：36　P.M.　チップの学校。廊下にはラルフとベティのスタナー夫妻が待っている。
ラルフ「ご主人は？歯痛でも起きたかな？」
ママ「（笑いつつ極度に呆れて）冗談ばかり」
ママは呼ばれて教室へ入ると、持参した手作りケーキをスタビンズ先生に渡す。
スタビンズ「チップはなかなか熱心に勉強してます。クラスでも活発に発言しますし」
ママ「いい子です」
スタビンズ「しかし、問題がある。頭の中はホラー映画で一杯です」
ママ「ビデオ店でバイトを」
スタビンズ「異常なのめり込みようです。（絵を見せ）先週、こんな絵をかいた。家庭に問題でも？」
ママ「とんでもない」
スタビンズ「離婚？親類にアル中でも？彼は子供の時に動物虐待を？」
ママ「してません。うちは模範的な家庭です」
スタビンズ「家庭に問題があるはずです。彼を精神科医に。今日はこれで結構です」
ママの顔は怒りでこわばる。
車で待ち伏せしていたママは、スタビンズが出てくると車をゆっくりと走らせる。彼が振り返るとニッコリ笑いかけるが、次の瞬間、アクセルを一杯に踏み込んで…。彼をはね飛ばし、バックしてとどめを刺す。それを、木陰でヤクを吸っていた女生徒が見ている。
●5：22　P.M.　チップの部屋。チップはバーディ、スコッティと残酷なホラー・ビデオを見ている。ママはクッキーを持っていき、
ママ「スタビンズ先生がビデオの見過ぎですって」
チップ「イヤミな教師だ」
ママは友人たちを帰すと、息子に言う。
ママ「心臓をえぐるシーンをもう一度見ない？」
●6：30　P.M.　夕食。ママは血の滴るようなミートローフをテーブルに運ぶ。そこへ、ローズマリーが飛び込んでくる。
ローズマリー「大変！学校で先生が殺されたわ。スタビンズ先生よ」
チップ「僕の数学教師だ」
一同は急いでテレビを見る。
ＴＶリポーター『目撃者が一人います。（女生徒にマイクを向け）何を見ましたか？』
ルー・アン『青いワゴンよ』
チップ「ルー・アンだ」
ミスティ「ヤク中よ」
ローズマリー「あなたと同じ車ね」
ママ「私は安全運転よ」
ルー・アン『先生ったら車にひかれてペシャ



ンコ。もうオエーよ。何度もひいたわ』
チップ「死ぬなんて！」
ママ「嫌いでしょ」
チップ「殺すほどじゃないさ」
●10：45　P.M.　ママとパパの寝室。
パパ「明日はバードウォッチングだ」
ママ「（手にした本のチャールズ・マンソンの写真を手でなでながら）最近、小鳥の見分けがつくようになったわ。お休みのキスは？」
パパ「先生のことを考えて…」
ママ「それより楽しまない？」
2人はたちまち燃えてきて、ママは大きなよがり声を出す。子供たちは、それぞれの寝室でたまげた顔。
パパ「（モーレツに頑張って）イクぞ、ハニー、発射だ！」

●5月15日土曜日、7：30　A.M.　窓から双眼鏡で庭の小鳥を眺め、ゴキゲンのママ。突然、視界に例の2人の刑事と、サトフィン家の方をしきりに指さし、興奮げにしゃべっているローズマリーが飛び込んでくる。そこへ、ラルフの虫歯をどうしても診てくれというベティの強引な電話。バードウォッチングはパー。腹の中が煮えくり返るママ。キッチンでは泣きべそのミスティ。
ミスティ「カールが来ないの。迎えに来る約束なのに。殺してやりたい」
ママ「物騒なこと、言わないで」
窓の外をのぞくと、2人の刑事がゴミ箱を漁り、ガレージを覗き込んでいるではないか。
●8：10　A.M.　刑事たちがやってくる。秋波を送るミスティ。
パイク「先生が死んだのは、ご存じで？」
ママ「もちろん。本当にいい先生でした」
スコッティとバーディが車で来る。
ママ「スコッティよ。シートベルトをしてないわ」
バーディ「“呪われた悪夢”」
スコッティ「“血しぶき教師殺人”」
パイク「ふざけるな」
グレーシー「昨日、車でＰＴＡに？」
ママ「ええ」
パイク「父兄で青いワゴン車を登録してるのは、奥さんだけでして」
パパ「家内が関係してると？」
スコッティ「（ママを指さし）そうさ。ワゴン車で先生を地獄送り」
チップ「よせよ」
ママ「聞いた話じゃ、目撃者は麻薬中毒ですってね」
スコッティ「（雑誌を出して）たまんないね」
雑誌の名前のＰの字が切り抜かれている。
ママ「隣のローズマリーが見ている映画雑誌だわ。バイオレンス映画はごめんよ。うちじゃ、雑誌は再生紙用に出してます」
●10：06　A.M.　几帳面にゴミを分別していたママは、ローズマリーが大量のゴミを分別もせずに捨てているのを窓から見て、またもムカムカ。ゴミの回収員たちにゴミ袋を出すついでに、ドリンクを渡し、
ママ「今日もご苦労様。差し入れよ」
ガス「ありがてえ。（ローズマリーをさし）ゴミをまきちらしてる」
ママ「何度も注意したのに、馬の耳に念仏。リサイクルのために分別する気なしよ」
スロッピー「勝手な住人のおかげで、税金のむだ使いだ」
ママ「住民の敵よ」
スロッピー「根性が腐りきってる。殺されりゃいいんだ」
ガス「そうさ。（首を切る真似をして）思い知らせろ。粗大ゴミだ」
ママ「殺してくれる物好きがいるかもよ」
●ローズマリーの家。ローズマリーとドッティがＴＶを見ているところを、窓の外から様子をうかがうママ。2人はギョッとするが、
ローズマリー「ビバリーね、入って。ビールでも？」
ママ「コーヒーで結構（ドッティを抱き締め）イタズラ電話のこと、聞いたわ」
ドッティ「災難よ」
ママ「（花瓶にさした植物を見て）ネコヤナギ（プッシー）？」
ドッティ「何ですって？」
ママ「ネコヤナギ（プッシー）よ」
言いつつ、横にあった陶器の卵を床に投げつけて割る。
ママ「大変！何てことするの！」
ドッティ「私じゃ…」
ローズマリー「大事なフランクリンミントの陶器の卵が！」
ママ「彼女に悪気はないでしょ？」
ドッティ「私じゃないわ。彼女よ！」
ママ「ノミの市で手に入るわ」
ママはさっさとローズマリーを連れて外に出る。ドッティはその後ろ姿に向かって、
ドッティ「電話の声はビバリーよ」
●10：35　A.M.　パパの歯科診療所。パパはスタナーの歯をギリギリ削り、大声を出させる。そこへ、2人の刑事がやって来る。
グレーシー「（本を見せ）奥さんは読書家で？ゴミの中に“殺人衝動”と“ヒューストンの殺戮”がありました」
パパ「きっと息子のだ」
パイク「いや、奥さんのです。ブローズ書店で雑誌をまとめ買いしてる」グレーシー「“人間狩り”も。支払はカード。日付は2月5日」
パパ「バカな」
グレーシー「奥さんはプッツンですか？」
●ノミの市。冷やかし客に嫌味を言うミスティにママ、
ママ「失礼よ。カールにフラれて八つ当たりしないで」
その時、ママの目が他のガールフレンドとイチャついているカールをバッチリ捕え、険しい光をたたえる。彼女が甘え声で、フランクリンミントの卵をカールに買わせるのを見ると、ママはローズマリーが買ってきた火かき棒をつかみ、トイレに入ったカールを追う。
●11：20　A.M.　トイレ。用を足している



カールを後ろから狙うママ。不意に個室から男が出てきて、ママはそばの個室に隠れる。たまたま隣の個室で落書きをしていたチカン男が、壁の穴からママを目撃。ママは個室から出ると、カールを背中から火かき棒で串刺しに…。火かき棒についてきた肝臓を振るが、なかなか落ちてくれない。指で摘んでやっと振り落とすが、今度は落ちた肝臓で足を滑らせそうに…。何食わぬ顔でママがミスティの出店に戻った途端、トイレから叫び声。たちまち野次馬が集まり、ミスティも飛んでいく。ローズマリーがママの運動靴を見て、

ローズマリー「靴に汚物が付いてるわ」

ママ「あら、イヤだ」

ママは靴の裏の血をカーペットでぬぐい取る。事情聴取されたチカンは言っている。

チカン「男子トイレに女がいた。隣に美人がいたんだ」

担架で運ばれるカールを見て、ミスティは悲鳴をあげる。それをチェックするグレーシー。パイクはカールのガールフレンドの挑発的な目つきにクラクラ。戻ったミスティは言う。

ミスティ「カールがトイレで殺されたのよ」

ママ「望み通りね」

ミスティ「本気じゃなかったわ。死ぬなんて」

ローズマリーは火かき棒が血に染まっているのに気づき、唇を噛みしめる。

●サトフィン家の寝室。パパはベッドの下から殺人事件の記事のスクラップやら、男のマッチョな写真やら、カセット・テープやらをみつける。テープをかけてみると、

テープの声『囚人バンディだ。死刑執行が6日後に迫って、みじめな気分だ…』

思わずテープを切るパパ。すると、ラジオが入る。

ラジオ『今しがた、マーケット・ビルのトイレで若い男の惨殺死体が発見されました。犠牲者はカール・パジェット…』

●ビデオ・ショップ。チップたちのところへ、ミスティが飛び込んでくる。

ミスティ「ママはチャールズ・マンソンよ。私をコケにしたカールが殺されたわ。チップの嫌いな先生もあの世行き。ママの仕業だわ」

チップ「面白い発想だ。ママ主演のオカルトを作れば当たるぜ」

バーディ「意地悪な叔母を始末してもらうわ」

キッド「俺の叔父も頼むぜ」

チップ「隣のオバンも。次の犠牲者は？」

ミスティ「ふざけないでよ。ママがまた殺すかもしれないわ」

●7：31　P.M.　夕食。ママが夕食をテーブルに運んでくるとパパ、

パパ「恐ろしい悲劇が起こらないよう祈ろう」

ママ「アーメン。ひどい1日だったわね」

ママは笑うが、他の3人は笑えない。

チップ「スコッティはママが殺人犯だって」

ママ「（大笑いして）シートベルトもしないで、よく言うわ」

ママが席をたつ。不安になった3人は顔を見合わせる。ミスティがキッチンへ行ってみると、伝言板に“スーパーへ、ママ”のメモ。

ミスティ「消えたわ！彼を殺しに」

チップ「ママが殺しを？」

パパ「ママは何か問題があるに違いない」

3人は車に乗り、スコッティの家へ急ぐ。パトカーがそれを追跡する。

●8：01　P.M.　スタナー家。夕食中の夫婦を窓の外から偵察するママ。トリ肉にムシャブリついている夫婦を見て、ママの脳裏にはかわいい小鳥たちの姿が浮かび、ますます怒りメラメラ。食後に1ラウンドと考えたベティが寝室へ上がり、クローゼットを開けると、シューズボックスが動いている。ネズミかと思いきや、ドレスの間から姿を現したママが、ハサミでベティの腹をズブリ。

●スコッティの家。両親の留守に、スコッティはポルノ・ビデオを見ながら、ベッドで呻き声をあげて自慰の真っ最中。そこへ到着したパパと子供たちが部屋に入ると、あられもないスコッティが…。刑事たちも銃を構えて侵入。彼は真っ青になって毛布の中に隠れる。

●スタナー家。夫人の大声で駆けつけたラルフに、ハサミを投げつけるママ。しかし、何度投げても命中しない。家の外に逃れた彼を、窓から落としたエアコンで仕留めるママ。

●サトフィン家。帰宅したパパ3人たちを、ママが迎える。

ママ「デザートは？イチゴよ」

●5月16日、日曜日、10：37　A.M.　教会へ行こうと玄関をでたサトフィン家の4人は、ズラリ並んだパトカーにビックリ。パトカーは教会まで金魚のフンのようについてくる。車のラジオでニュースが言っている。

ラジオ『昨夜、スタナー夫妻が無残に殺されました。これで犠牲者は4人。同一犯人による連続殺人（シリアル）事件です。先ほど、警察から恐るべき容疑者の名前が公表されました。カルバートン通り2815のビバリー・サトフィンです』

ママ「（大笑いして）あーら」

ミスティ「私、恋人が一生できないわ」

パパ「殺したのか？更年期障害？」

チップ「家族には正直に言って。連続殺人犯？」



ママ「私の知ってるシリアルは食べ物だけよ」

すれ違った車の中の一家は、ママの顔を見るなり、そろって悲鳴をあげる。

パパ「いい精神科医を探す」

●教会。一家が車から降りて礼拝堂へ進むと、人々は恐々と道を開けるカメラマンがいきなり写真を撮る。

カメラマン「あなたはシリアル・ママ？」

チップ「シリアル・ママ？イカすや」

司祭のお祈りの最中に、無線で逮捕命令を受けた刑事たちが紛れこむ。ママがクシャミをし、タンが赤ん坊の頬に飛ぶと、その母親が驚いて大声を出す。途端に、人々はパニックに。そのすきにママはチップ、バーディと外に逃れ、車で脱出する。

チップ「ママは話題の人だ」
バーディ「フレディもジェイソンも真っ青の殺人鬼よ」
●12：08　P.M.　ビデオ・ショップ。チップとバーディは、ひとまずママを店の奥にかくまう。やってきたジェンソン夫人は映っているホラーを見て、
ジェンソン夫人「そんなに血に餓えてるの？消して。“アニー”はある？」
チップ「あります。“ゴースト・パパ”は？」
ジェンソン夫人「返すわ」
チップ「テープは巻き戻してと何度も言ったはずです」
ジェンソン夫人「巻き戻すのはイヤ」
チップ「書いてあるでしょ。巻き戻さない場合は1ドルの罰金と。レンタル料プラス1ドルで3ドル99です」
ジェンソン夫人「お釣りは結構よ、殺人鬼の息子」
それを聞いていたママが消える。チップとバーディはあわてて夫人の家へと向かう。その後をスコッティがつける。
●12：33　P.M.　ジェンソン夫人の家。サンドイッチを頬張り、犬をはべらせ、“アニー”を見る夫人。ママがドアを破り、こっそり入ってくる。吠える犬に足をなめさせて黙らせ、主題歌を歌う夫人。ママはキッチンで失敬した包丁を背後から振りかざす。しかし、ふと考え直し、キッチンへ戻ってラム肉の塊を手にする。ついでに犬におすそわけして、手なずけて…。再び居間へ戻ると、夫人の頭に何度もラム肉を降り下ろす。それから、ビデオを巻き戻しながら怒鳴る。
ママ「巻き戻せ！」
ママの目がふと、ガレージの屋根の上のスコッティに止まる。あわてて逃げ出すスコッティ。チップの肩に乗って居間の死体を見たバーディは真っ青。
バーディ「血よ！映画と違って茶色だわ」
ママは包丁を手にスコッティを追いかける。彼が車に乗り込むと、そのルーフを何度も包丁でズブリズブリ。
ママ「シートベルトをお締め！規則よ！」
彼が逃げると、停車していたバンの運転手を包丁で脅し、バンを拝借して追跡する。
チップとバーディは、車で来たパパとミスティに合流。彼らの目の前を、逃げるスコッティと追うママの車が猛スピードで走り抜けて行く。あわてて追う4人。張っていたパイクとグレーシーも無線で連絡する。
グレーシー「シリアル・ママが暴走。イカれてるから用心しろ」
●2：47　P.M.　ライブ・ハウス。逃げ込んだスコッティを追ってママが来る。
ママ「警察に追われてるの」
ドアマン「シリアル・ママかよ」
ママ「当たり」
ドアマン「入んな」
中ではヘビメタ・バンドの演奏に皆、ギンギン。ママはスコッティが舞台へ逃げたところで、どん帳の紐を切る。頭上から降ってきたどん帳で彼が倒れると、スプレーとライターで火を吹きつけ、彼を火ダルマにする。
ママ「おっ死ね！」
ママは駆けつけたパパに笑顔でハーイ。次の瞬間、刑事たちに逮捕される。ライブ・ハウスの若者たちから、「シリアル・ママ！」のシュプレヒコールが沸き起こる。
●5カ月後。10月4日、月曜日、9：46　A.M.　法廷。ママは入廷するなり、陪審員たちに愛想を振りまく。



ママ「皆さん、ビバリーよ。ステキな服ね」
裁判長「私語はつつしんで」
ママ「（パパに）ハニー（子供たちに）宿題した？」
裁判長「被告に忠告する。ここは喫茶店ではない」
検察側の冒頭陳述が始まる。
検察人「陪審員の皆さん、ここで裁くのは並の犯罪ではありません。被告ビバリー・サトフィンは戦慄すべき悪魔、芯まで腐り切った毒リンゴです。6人を殺害したのです」
チップ「（小声で）罰を下したのさ」
パパはあわてて、息子を静かにさせる。
検察人「殺害方法は綿密かつ残忍です。凶器は自動車、火かき棒、ハサミ、エアコン、メラメラと燃え盛る炎、ラム肉の足さえ使いました。被告は人間ではない。ケダモノです」
裁判長「では弁護側、どうぞ」
弁護人「これは実に気の重い裁判です。被告の家族とは16年来の付き合いで…」
ママが弁護人にメモを示す。“陪審員の一人が秋に白い靴をはいているわ”と書いてある。
弁護人「被告は精神異常です。殺人を犯したのは病気のせいです」
ママ「異議を申し立てます。弁護人を解雇し、自分で弁護します」
弁護人「被告の犯罪は病気のせいではない！」
ママ「1964年のウエア裁判でも、被告が自分の弁護をしています」
裁判長「自分で弁護すると不利になりますぞ」
けれども結局、裁判長はママの要求を認める。
裁判長「申し立ては？」
ママ「無罪です」
法廷中が沸き、裁判長が木槌を鳴らして静粛を叫ぶ。まず、ドッティが証人席につく。



検察人「猥褻電話がありましたか？」
ドッティ「ありました」
検察人「声に聞き覚えは？」
ドッティ「はじめは分からず、後でハタと気づきました。声の主が誰か」
検察人「誰の声ですか？」
ドッティ「そこにいるビバリー・サトフィンです。恐ろしい女」
ママが質問する。
ママ「お酒は？」
ドッティ「飲みません」
ママ「私と会ったあの日も、飲んでいなかったと言うのですか？」
ドッティ「ビール一杯は、お酒に入りません」
ママ「でも飲んだのに、飲まないと嘘を」
ドッティ「違うわ。淫売！」
法廷がどよめき、裁判長が注意する。
ドッティ「私にファック・ユーと言ったのよ」
ママ「聞くに耐えない言葉だわ」
ドッティ「クタバレ！」
裁判長「もう一度言ったら、法廷侮辱罪で罰しますぞ」
ママ「あなたは精神異常？」
ドッティ「違うわ。売女め！」
裁判長「証人を有罪と認め、3000ドルの罰金と禁固5日を命ずる」
ドッティはなおも汚い言葉を吐きながら、連れ去られる。パパにウィンクするママ。

●10月5日、火曜日、10：05　A.M.　裁判所の前。ミスティが出店を構え、ハルと一緒にシリアル・ママ・グッズを売りさばく。
ミスティ「シリアル・ママＴシャツが12ドル。カード払いもＯＫよ」
●裁判所の廊下。携帯電話で話すチップ。
チップ「安いギャラじゃ受けない。プロデューサーによく言っとけ。飛行機はファースト・クラスだ」
青年がやってきて、パンチを食らわす。
青年「兄を殺された」
チップ「そうカッカするな。カールの弟？お悔やみを言うよ。肖像権契約は？」
青年「ＴＶ？雑誌？」
チップ「ＴＶさ。スザンヌ・サマーズがママ役を演じる」
青年「兄貴の役は？Ｊ・プリストリーにしろ」
●法廷。検察人がルー・アンに証人喚問を行っている。彼女はバカ笑いを続けている。
検察人「スタビンズ先生をひき殺したのは、どんな車でしたか？」
ルー・アン「ケーブルＴＶで見たの」
検察人「車は…あなたは…」
ルー・アン「あのさ、青って言ったのは車のことよ。運転手じゃないわ。ブルーってこと」
●裁判所前。シリアル・ママの本の作家ハルが、サイン会を開いている。
客の女性「“第2のママへ”と」
ハル「彼女が犯人と思います？」
客の女性「濃厚ね」
客の女性2「私も2、3人、殺してみたいわ」
●法廷内。グレーシー刑事を証人席にすえ、本を手にした検察人が喚問する。
検察人「殺人関係の本がママの犯行を物語っています。この本をどこで？」
グレーシー「ビバリーのゴミ箱です」
ママの反対尋問にうつる。
ママ「刑事さん、お宅のゴミ箱を覗くと、どんな雑誌があります？」
グレーシー「タイム、スポーツ、ナショナル・ジオグラフィック。妻も婦人雑誌を」
ママ「昨夜、ゴミ箱でこれを見つけました。（雑誌を見せ）“悶絶ポルノ特集”」
廷内は爆笑の渦。
グレーシー「プライバシー侵害だ」
ママ「エロ本を読むのを責めませんわ。以上です」
グレーシー「私は結婚してる身だぞ。ガス室へ送ってやる」

裁判長「陪審員は証人の暴言を無視するように」
ローズマリーが証人席につく。
検察人「火かき棒はどんな状態になってましたか？」
ローズマリー「30分後に戻ると、棒は血まみれで、カールが殺されてました」
ママが質問する。
ママ「あの時、あなたはどのお店に？」
ローズマリー「陶器の」
ママ「カールが陶器の卵を買いましたね」
ローズマリー「欠けてたから私は欲しくなかったわ」
ママ「彼を殺したのでは？」
ローズマリー「人を傷つけたことはないわ」
ママ「文字の切り取られたあなたの雑誌は？スタナー殺しのハサミもあなたの物です」
ローズマリー「ええ、でも…」
ママは怖い顔で彼女の前に迫り、
ママ「ゴミの分別は？」
ローズマリー「いいえ」



廷内から憤慨の声。
ローズマリー「キッチンが狭くて」
彼女は肩身を狭くする。検察人がパイクに証人喚問する。
検察人「ライブ・ハウスに入りましたか？」
パイク「はい。スコッティが火ダルマで倒れてました」
検察人「（写真を見せ）このように？」
パイク「ええ、バーベキューです」
検察人「（裁判長に）陪審員に回しても？被告の殺しぶりを見ていただきたい」
だが、女優のスザンヌ・サマーズが入ってきて、パイクの目も裁判長の目も釘づけに。
次の証人は、あのチカンおやじ。
検察人「問題の日、マーケット・ビルのトイレにいましたね」
ピクルス「いました」
ママは机の下で足を大きく開いてヒラヒラさせる。ピクルスはおちおち答えていられない。
検察人「隣に誰かいましたか？」
サマーズの携帯電話が鳴り、注意がそれる。
検察人「誰か見ませんでしたか？」
ピクルス「分かりません…誰もいなかった」
検察人「ハッキリ言ったはずだ。隣のトイレで女性の靴を見たと」
ママのヒラヒラが大きく、激しくなる。
ピクルス「あんたが言えと」
検察人「偽証は重罪ですよ」
ピクルス「（息をハアハアいわせ）ありゃあ作り話だ。ビバリーは見たこともない」
検察人「猥褻罪で訴えてやる。以上です」
ママが立ち上がって言う。
ママ「検察側は何も証明していません。論告を終わります。弁護側は以上です」
法廷内に拍手喝采が満ち、休廷にはいる。
●サマーズのインタビュー。記者に囲まれ、



サマーズ「ビバリーはぬれぎぬを着せられたんだわ。善良な主婦が状況証拠の罠にハメられたのよ」
●法廷。検察人が最終弁論を行う。
検察人「悪名高い連続殺人犯ルーカス、ゲイシー。それにニューフェースが加わりました。被告は6人を殺害した第一級殺人犯です」
ママが最終弁論を行う。
ママ「私は皆さんと同じ普通の女です。ところが、警察の罠にハマりました。友人だと信じてた人々さえ偽証を…。どうか冤罪で起訴された私を、無罪にする勇気を持ってください」
●その2日後、10月7日、木曜日、法廷。ママはさっきから、陪審員席の白い靴をはいた婦人に、キツい視線を向けている。
裁判長「陪審員の評決は出ましたか？」
陪審員長の女性「はい、出ました。陪審員は被告を無罪とします」
拍手喝采があがり、ママは笑う。
パパ「（子供たちに）どうする？」
チップ「連れて帰るしかない」
バーディ「もう殺人はごめんだわ」
ハル「僕を気に入る？」
ミスティ「愛想よくね。ママを怒らせないように」
彼らはママに笑いかける。
●裁判所の廊下。人々に囲まれ、花束を受け、ゴキゲンのママ。が突然、怖い顔をして電話コーナーに入り、白い靴の陪審員がかけていた電話を切る。
ママ「秋に白い靴は合わないわ」
白い靴の女性「昔の話よ」
ママ「いいえ、母親に教わらなかった？」
いきなり、受話器で殴りつける。
白い靴の女性「やめて。ファッションは変わったのよ」
ママ「変わらないわ」
ママは再度、殴りつける。
●再び、廊下。スザンヌ・サマーズが戻ってきたママと、記者たちのカメラにツーショットで収まろうとする。
サマーズ「ビバリー、あなたはこっち」
彼女はママが左側に立とうとするのを断固、阻止する。ついにママが怒鳴る。
ママ「こっち側は写りが悪いのよ！」
その時、陪審員長が死体を見て叫ぶ。ママの顔を恐怖の面持ちで見るサマーズ…。
——ビバリー・サトフィンは本作品への協力をすべて拒絶した——

THE END

CREDITS

キャスト
ママ（ビバリー・サトフィン）●キャスリーン・ターナー
パパ（ユージーン・サトフィン）●サム・ウォーターストーン
ミスティ・サトフィン●リッキー・レイク
チップ・サトフィン●マシュー・リラード
パイク刑事●スコット・ウェズリー・モーガン
グレイシー刑事●ウォルト・マクファーソン
スコッティ●ジャスティン・ワーリン
カールのガールフレンド●トレイシー・ローズ
白い靴の陪審員●パトリシア・ハースト
スザンヌ・サマーズ●スザンヌ・サマーズ
ドティ・ヒンクル●ミンク・ストール

スタッフ
脚本・監督●ジョン・ウォーターズ
プロデューサー●ジョン・フィドラー、マーク・ターロフ
製作総指揮●ジョセフ・カラキオッロJr.
撮影監督●ロバート・スティーブンス
音楽●ベイジル・ポールドゥリス
音楽スーパーバイザー●ボーンズ・ハウ
衣裳デザイン●ヴァン・スミス
プロダクション・デザイン●ヴィンセント・ペラーニオ
編集●ジャニス・ハンプトン、エリカ・ハギンズ
キャスティング●ポーラ・ヘロルド、パット・モラン
製作●ポーラー・エンターテイメント
挿入歌●"ガス・チャンバー" by L7
"デイブレイク" by バリー・マニロウ…etc.
サヴォイ・ピクチャー作品

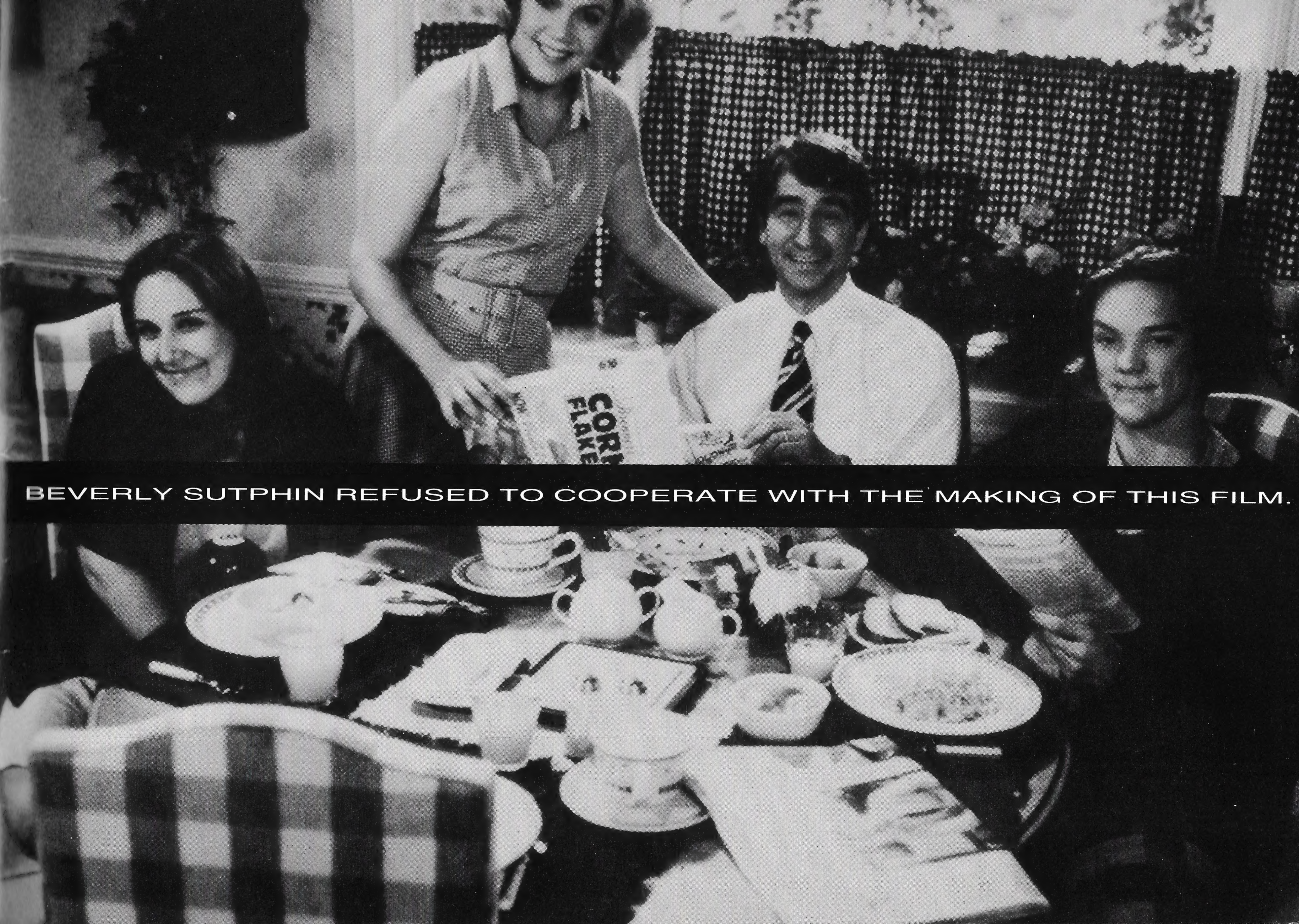
CAST
Mom (Beverly Sutphin)●KATHLEEN TURNER
Dad(Eugene Sutphin)●SAM WATERSTONE
Misty Sutphin●RICKI LAKE
Chip Sutphin●MATTHEW LILLARD
Detective Pike●SCOTT WESLEY MORGAN
Detective Gracey●WALT MACPHERSON
Scotty●JUSTIN WHALIN
Carl's girlfriend●TRACI LORDS
Juror#8●PATRICIA HEARST
Suzanne Somers●HERSELF
Dottie Hinkle●MINK STOLE

STAFF
Writer & Director●JOHN WATERS
Producers●JOHN FIEDLER/MARK TARLOV
Executive Producer●JOSEPH CARACCIOLO Jr.
Director of Photography●ROBERT M. STEVENS
Music●BASIL POLEDOURIS
Music Supervisor●BONES HOWE
Costume Designer●VAN SMITH
Production Designer●VINCENT PERANIO
Editors●JANICE HAMPTON/ERICA HUGGINS
Casting●PAULA HEROLD/PAT MORAN
A POLAR ENTERTAINMENT PRODUCTION

SAVOY PICTURE Production



平成7年4月29日発行◆発行承認／松竹富士株式会社◆編集・発行／松竹株式会社事業部◆定価六〇〇円(税込み)


BEVERLY SUTPHIN REFUSED TO COOPERATE WITH THE MAKING OF THIS FILM.

SERIAL MOM



SAVOY PICTURES Presents A POLAR ENTERTAINMENT Production A Film By JOHN WATERS
KATHLEEN TURNER "SERIAL MOM" SAM WATERSTON RICKI LAKE And SUZANNE SOMERS BONES HOWE BASIL POLEDOURIS
JANICE HAMPTON And ERICA HUGGINS ROBERT STEVENS, A.S.C. JOSEPH CARACCIOLO, JR.
R RESTRICTED DOLBY STEREO JOHN FIEDLER And MARK TARLOV JOHN WATERS A SAVOY PICTURES RELEASE SAVOY PICTURES
Soundtrack available on MCA Compact Discs and Cassettes



Illustration : M.MITOME